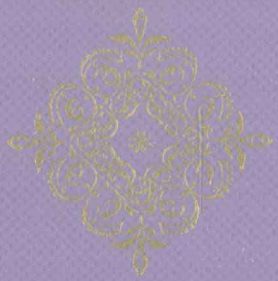

A TREASURY OF JAPANESE POETRY

日本の詩歌

3

正岡子規
伊藤左千夫
長塚節
高浜虚子
河東碧梧桐

中央公論社

目次

正岡子規
寒山落木　7
俳句稿　44
未定稿　59
竹の里歌　69

伊藤左千夫
左千夫歌集　103

長塚節
長塚節歌集
高浜虚子
五百句
五百五十句
六百句
六百五十句
七百五十句
河東碧梧桐
175
247
264
277
288
305

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

新俳句 323
春夏秋冬 332
続春夏秋冬 339
新傾向句集 347
八年間 371
碧 383
三昧 387
詩人の肖像 山本健吉
鑑賞 加藤楸邨
年譜

正岡子規

寒山落木

『寒山落木』は子規が自ら書きとめておいた句稿で、巻一から巻五までである。『俳句稿』巻一・巻二がこれに続く。『寒山落木』巻一は明治十八年より明治二十五年まで、巻二は明治二十六年、巻三は明治二十七年、巻四は明治二十八年、巻五は明治二十九年、『俳句稿』巻一は明治三十年より明治三十二年まで、巻二は明治三十三年より明治三十五年までを収め、総句数約一万八千。

明治十八年は、子規が愛媛県松山市新玉町に生れたのが慶応三年（一八六七）九月十七日（陰暦）であるから、数え年十九歳にあたる。夏目漱石、幸田露伴、尾崎紅葉等も同年に生れている。『寒山落木』には、上記の「朝霧の」の外に六句が録せられているが、「筆まかせ」によると「余は幼時より何故か詩歌を好むの傾向を現わしたり。

明治十八年

朝霧の中に九段のともし哉（かな）

明治十九年

一重（ひとへ）づつ一重づつ散れ八重桜

明治二十年

宵闇や薄に月のいづる音

明治二十一年

梅雨晴やところ〳〵に蟻の道

明治己丑二十二年

白砂のきら〳〵とする暑さ哉

（略）この先生（土屋久明）につきて詩を作るの法、すなわち幼学便覧を携え行きて平仄のならべかたを習いしは明治十一年の夏にて、それより五言絶句を毎日一ツずつ作りて見てもらいたり。（略）余が和歌を始めしは明治十八年井手真棹先生のもとを尋ねし時より始まり、俳句を作るは明治二十年大原其戎宗匠のもとに行きしを始めとす」とある。其戎は桜井梅室の門。子規は十六年松山中学を退いて、十七年七月、大学予備門に入学している。

「一重づつ」の句。八重桜よいっぺんに散らないで一重ずつ散れというところに、数的な理屈があって、初期の傾向をうかがうことができる。「俳句の初歩」に「予の初め俳句に入るや、自ら思い立ちて入りしにあらず、人に勧められて入りしにあらず。師に就くにあ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

内藤先生等と言志会を結びし時

渋柿もまじりてともに盆の中

明治二十三年　（紀元二千五百五十年）

あたゝかな雨がふるなり枯葎

菜の花やはつとあかるき町はつれ

明治二十四年辛卯年　（紀元二千五百五十一年）

白魚や氷の中に生れけむ

らず、友とともにするにあらず。たまたま一二巻の俳書を見る、あえて研究せず、熟読せず、句の解せざるもの十中に九、すなわち巻を抛って他を為す。戯れに一二の俳句を作る、趣味において得る所あるにあらず、語句において練る所あるにあらず、あるいは縁語、駄洒落に思いを凝らし、あるいは極めて浅薄陳腐なる意匠を繰り返して独り自ら喜ぶ。それすら一二句を得ればすなわち思想涸渇してまた一字を吐くあたわず」と述べている。十九年はこの一句だけであるが、二十年の「谷中にある清水うしの墓にまうでて　一枝やたましひかへす梅の花」「上野　花の雲かかりにけりな人の山」、二十一年の「海原や何の苦もなく上る月」、二十二年の「高砂の松は二タ子か門の松」等は前記の追想に該当するもので、上欄には比較的素直な傾向の句を抄出した。

花ちるや寂然として石仏

夏

鰻まつ間をいく崩れ雲の峰

秋

あるおそろしき女を

稲妻の顔をはしるや秋のくれ

三津いけすにて

初汐や帆柱ならぶ垣の外

音頭瀬戸

秋風や伊予へ流るゝ汐の音

大宮氷川公園

明治十六年上京、下宿替えの上、明治二十一年九月、旧松山藩主久松家が藩出身学生を収容する常盤会寄宿舎の舎生となり、ここに二十四年秋までいた。これは初め坪内逍遙の住居で、明治二十年久松家で買いとったもの。逍遙の「当世書生気質」はここで書かれたといわれる。子規は十八年にこの書と「小説神髄」とを読んでいる。常盤会寄宿舎二代目の監督が内藤素行（後の鳴雪）で、言志会は二十二年から翌年まで漢詩等を共にしたものという。「渋柿も」の句は席上柿があったものか。渋柿に自分を寄せているのである。

二十二年四月、水戸に旅行して那珂川を下る船中、薄着のため震えがあった。帰って、五月九日夜突然喀血。「水戸紀行」に「この船中の震慄が一箇月の後に余に子

ふみこんで帰る道なし萩の原

冬

小春日や浅間の煙ゆれ上る

明治二十五年

新年

御降の氷の上にたまりけり

春

（時候人事）長閑さや障子の穴に海見えて

朧夜にくづれかゝるや浪かしら

規の名を与えんとは、神ならぬ身の知るよしもなけれど」とある。「啼血始末」によるとその夜「卯の花の散るまで鳴くか子規」等四、五十句作ったというが、二句しか残っていない。翌二十三年「歳始書懐」という詩に「繫将生命細如糸　啼血三旬号子規（余喀血後号子規）」とあって、鳴いて血を喀くというホトトギスに由来する号だということがわかる。「筆まかせ」に「子規（音にても読みまた訓にても使う）」とある。

二十三年六月には松山に帰省、九月帰京。途次幻住庵址、石山寺、三井寺、義仲寺等に寄っている。

二十四年三月河東碧梧桐上京、常盤会寄宿舎に入り、五月高浜虚子初めて書を寄せる。六月学年試験を抛擲して帰国、木曽路を歩く。『寒山落木』に収録されていない

（天文）うぐひすの茶の木くゞるや春の雨

須磨を出て明石は見えず春の月

（動物）鹿の角落てさびしき月夜哉

石手川出合渡

若鮎の二手になりて上りけり

白魚は雫ばかりの重さ哉

（植物）しんとして露をこぼすや朝桜

青海苔や水にさしこむ日の光

夏

（時候人事）はら〳〵と風にはじくや鵜の篝

（天文地理）五月雨にいよ〳〵青し木曽の川

句に、鳥居谿での「馬の背や風吹きこぼす椎の花」、木曽の桟での「桟や水へとゞかず五月雨」、馬籠峠での「白雲や青葉若葉の三十里」等がある。

二十四年冬『俳句分類』に着手。「この書中に収むる俳句はなるべく多からんことを欲するが故に完結の期ある無し。ただただ余が力尽き身斃るる時をもって完結の期とすべし。これ余が自ら好んで完結するにあらず、余は無窮に完結せざらんと欲するものなり。しかも天は人間に無限の時間と勢力とを附与するを許さず。余が計画する無限の事業を限るに余が身命端尽の時期をもってせんとす」と明治三十年十二月『俳句分類』の文中に記している。

明治二十九年の「我が俳句」の中で「明治二十四年ころよりやや

根岸

（動物）水雞叩き鼠答へて夜は明けぬ

（植物）初瓜やまだこびりつく花の形

涼しさやくるり〳〵と冷し瓜

秋

（天文地理）名月やすた〳〵ありく芋畑

（動物）行く秋をすつくと鹿の立ちにけり

大磯

鈴虫や土手の向うは相模灘

（植物）唐辛子一ッ二ッは青くあれ

我声の風になりけり茸狩

俳句に熱心し、これを研究せんと思い起したり。このころ少しく実景を写し出さんと企てたれども毫も成功せず、なお前日の優柔孱弱の風を免れざりき。この年冬始めて七部集、三傑集を読み大いに感ずる所あり。漫遊の念熾なり、僅かに三日の糧をつつみて武蔵野を蹈んで帰る。往復得る所十数句に過ぎずといえども、また前日の孱弱なる音調、繊弱なる意匠にあらず、実景に得たるもの、空想を加えたるもの、皆多少の新趣味をそなえて斧鑿の痕少きを見る。句法のやや緊密におもむき、懈弛を脱したるもこの時よりの事なり。明治二十五年以後はほとんど俳句を生命とし、古書を読み句を作りもって今日に及べり。従ってこの年以後作る所の句数、以前に比して十倍二十倍の多きに上れり」と述べている。『寒山落木』所収の句数を見ると、二十二年の三十二

終りの冬

（人事）　乾鮭の腹ひやくと風の立つ

（生物）　小石にも魚にもならず海鼠哉

明治二十六年癸巳

はじめの冬

雪　馬の尻雪吹きつけてあはれなり

春

母の詞自ら句になりて

彼岸　毎年よ彼岸の入に寒いのは

句、二十三年の五十五句であるのに比し、二十四年は二百三十三句、二十五年は千六百六十二句と激増、二十六年、二十七年、二十八年と二千句台を続け、二十九年には三千句を越えたが、三十年以後は漸次減少している。

明治二十五年六月から新聞『日本』に「獺祭書屋俳話」を連載、翌年五月単行本として刊行。二十五年大学を退学、日本新聞社に入社している。この年二月には小説「月の都」を完成、幸田露伴に見せたが、会見の様を報じた同年三月一日付碧梧桐・虚子宛の書簡に「談じ去り談じ来るものは終始彼なり黙々また唯々たる者は終始吾なり」の語があり、追記の中に「拙著はまず。世に出る事。なかるべし。（以上の一行覚えず俳句の調をなす呵々）」と書いている。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo